は竹で、藁すぐりのようにしてこいたともいうが、福島県下などには、その痕跡がみつかっていない。いなべやという名称だけ残っているが、ここに稲をあげておいて、冬中かかってにわで稲をこいていた昔の面影がうかぶ。その当時は作業小屋に相当する小屋もなかったので、にわが土間で、専ら農作業場であった。このような形式は、岩手県北部にはまだあり、福島県でも山間部農家などにはまだ見られる。

田圃での機械化した脱穀風景、中荒井付近
（41.10.16写す）

小屋の隅におきさられた足踏み稲こき機
（田村山にて）

運搬するにもリヤカー、テーラー利用などが流行したし、発動機、小型モーターなどの普及によって、田圃で脱穀・調整をするという機械化農業が普及してきている。

稲こきはせんばごき時代は明治末でほぼ終り、本田辺では大正元年にチェン式の足ぶみ稲こきがはいったという。籾摺機の発動機によったのは大正六年頃といい、稲こきの小型モーターによったのは、それより一寸後れるかも知れない。この頃が、北会津村というより、日本農業の産業革命の一転機といってもよいようである。土ず